

経済学における「SRPの対立」および「SRPの前進性」の意味

野 口 旭

「SRPの対立」とはどの次元におけるものか

それではリプライをしたいんですが、私が答えられる範囲のところだけになることをあらかじめお断りしておきます。

まず、塩沢先生のコメントのなかで、方法論に関して幾つかご指摘がありました。最初に、ポパーの反証主義の理解がちょっとおかしいということですが、これは確かに書き方が少しおかしかったと思います。「理論命題が誤りである可能性が示される」と、単純にこう書いておけばよかったわけです。われわれとしてはそのような意図であったのですが、結果として無用な誤解を招きかねない表現になっておりました。

次に、ラカトシュのSRPに関してですが、これは非常に大きな問題だと思えます。吉田さんの方からも同様なコメントをいただいたわけですが、それは簡単に言うと、理論の対立・競合というのは、防備帯ではなくてむしろハード・コアにおいて行われるのではないか——このようなご指摘だと思えます。

私は、SRPの対立の根源はハード・コアの対立であるという、そのこと自体を否定しようとは思いません。しかし、序章にも書いておきましたように (p.10)、ハード・コアのハード・コアたる由縁は、それが本来的に反証不可能であるというところにあります。すなわちこれは、人々が抱く思想・信条なり価値観なりと同様に、間違っているとかが正しいということは本来問えない性質のものであるわけです。ですから、対立がこのような次元のものであれば、いくらやり合ってもそれを解決することは基本的に不可能であろうと思えます。つまり、お前がそういう立場なら俺はこれだという形になってしまい、理論の競合という形にはおそくならないだろう。言い合いをしても永遠に解決はつかないだろうということです。

実際、ファイヤアーベントに代表されるように、科学の対立をそのようなハード・コアの次元でのみ捉える人々は確かにいるわけです。しかしそうすると、先ほどお話いたしましたように、科学も魔術も同じだという結論になってしまいます。私は、塩沢先生が取り上げられたアンドレスキーという社会学者は知らなかったのですが、その本の表題から判断する限り、おそらく同じ様な科学観を持っているのではないかと想像します。

私がこのような考え方に同調できないのは、それが結果として、科学における対立というものを全て思想・信条の対立と同次元のものに位置付けることになってしまうからです。しかし、

それは必ずしもそうではないだろう、科学は科学としてきっちりと決着をつけることができる部分があるだろう、というのが、私の基本的なスタンスです。それは確かに非常に難しいことではありますが、先ほどの報告のなかで述べたとおり、それがないと非常に困ったことになる。そして、その難しい課題を解く手掛かりの一つが、たとえばラカトシュの「合理的再構成」の立場であると私は捉えています。

「SRPの対立」の把握はどの観点からなされるべきか

塩沢先生の指摘されたもう一つの問題は、われわれの「正統と異端」の把握は、正統が中心で、その反対側にあるのはただの寄せ集めに過ぎないのではないか、という点であったと思います。これは確かにご指摘のとおりです。そうになってしまう理由は、これまでの経済学の歴史、およびその現状を見ると、かつては古典派であり、現在では新古典派というものが圧倒的な優位を保っており、それに対抗する勢力はどうしても寄せ集めになってしまうという事実が厳然としてあるからです。つまり、「異端」の側が寄せ木細工になってしまうのは、それが経済学の歴史および現状の忠実な反映であるからです。

たとえば、ネオ・リカードイアン、ポスト・ケインジアンというのを、現代経済学における「異端」を代表するものと考えてみます。実際、「敵の敵は味方」とばかりに、ネオ・リカードイアンとポスト・ケインジアンを共闘させて新古典派に対抗するといった図式を描き出している人々がないわけではありません。しかし、そのような共闘が何らかの理論的に重要な成果を生むのかというと、どうもそうではないような気がします。というのは、同じ新古典派批判といっても、古典派的立場からの批判と、ケインズの立場からの批判では、基本的なスタンスが全くといってよいほど違うからです。それを無理矢理に一緒してもなかなかうまくいかないのは当然です。

それに対して、塩沢先生のような立場の方が、このような図式では非常に不満足であると批判されるのも、大変によく理解できます。単なる異端の寄せ集めではなく、研究者自らが依拠する「ただ一つの異端」の立場から、もっとはっきりと対立軸を出さなければいけないというご指摘と思いますけれども、一個の研究者の立場から考える場合には、それは確かにその通りだと思います。

そうすると、問題は結局、我々個々が一体どのような立場を採るべきかという事柄に帰着してしまいます。それはもちろん、簡単に答がでるような問題ではありません。しかし、ラカトシュ流の考えによれば、そこに判断の指針が全くないわけではない、ということになります。それが、先ほど言った「SRPの前進性」という基準です。つまり、あるSRPの有効性は、それに依拠することによって新たな知見がより豊富に得られるかどうか、すなわち前進的である

かどうかによって判断されるべきだということです。

とはいっても、序章でも強調したように、「退行的」と思われていたSRPが前進的に復活することもあるし、現在のところは前進的にみえるSRPが退行していくこともあるから、その選択には必ずある種の「賭け」が含まれることになるでしょう。おそらく個々の研究者は、主観的には最も前進的なSRPを選択しているのですが、どの世界にも「賭け」には勝ち負けがつきものです。この場合でいえば、「後世の評価」がそれにあたります。経済学の歴史の中でも、たとえば「ドイツ歴史学派」のように、退行して消失した流れも多いわけですが、個々の研究者が背負うこのようなリスクは、科学どの分野にもおそらく不可避なのだろうと思います。

あと、吉田さんの方から、「歴史」というのはそもそも現在の観点から見た歴史でしかないのではないか、という指摘がありました。それはその通りだと思います。しかし、その場合でも、「歴史」というものの意義については、さまざまな考え方があるように思うのです。たとえば、経済学史についていえば、昔の学説を忠実に解釈するというのが経済学史の一番重要な目的であるという考え方が一方にあり、おそらく現在でもそれは非常に支配的な見方であると思います。しかしここでは、そうでない観点もあるんだということを強調したいわけです。昔の学説を想源にしつつも、その解釈から自由に理論を展開させるということに、経済学史の意義を求める見方もある——それも一つの選択なんだということです。

新古典派の役割はどこにあるのか

高増さんの方からは、いくつか理論内在的なコメントをいただきました。また、私の章に関しては、結局問題を整理しているだけで、新しい理論的展望というものが示されていないのではないかというご批判がありました。それは、この論文に関する限りでは全くその通りです。この論文では課題をそこに限定したというのが、私の言い訳です。

それではお答えにならないので、論文を離れて、この点についての私の印象を少々述べてみたいと思います。確かに、高増さんも指摘されたように、近年、たとえばクルーグマン等が貿易理論の分野において新しい理論的な展開をしているわけです。しかし、そういった試みは、基本的には、新古典派というものを包括するような形で、それに取って変わろうというような性質の展開ではないのではないかと。そうでなくて、新古典派の通常の仮定の一部を変更することによって、別個の理論体系を作り、それによって新古典派では必ずしも明らかにできなかった「現実」に対して光を当てる——そういう意図のものではないか、というのが私の理解です。それはそれで、もしそのことによってこれまでの枠組みでは取り扱えなかった問題が本当に明らかになるというのであれば、非常に前進的な展開であると評価できると思います。

ただ、あえて付け加えておきますと、たとえばクルーグマンという人は、そういうことを一方でやりながら、他方では、自らが深くコミットしている戦略的貿易政策の理論などを安易に援用して粗野な主張を繰り返しているサローやプレストウィッツその他の人々をこっ酷く批判しているわけです。そしてそれは、そういう人々が標準的な経済学を理解しないで自分の直感を曖昧に述べているにすぎないことを批判するという、非常にオーソドックスな立場からの批判になっているのです。この例のように、新古典派を中心とするいわゆる標準的な経済学というものは、もっともらしいがあやしげな議論を吟味する場合の判断の基準としては役立っているのだろう。そういうものによって、現実の経済に対するより正しい図式なり指針を示すことができる部分は、まだまだ多いのではないか。クルーグマンの一連の啓蒙的論文などを読むと、逆にそういう印象を強くもたざるを得ないのです。以上です。